

講話直後に寄せられた「男も台なんですか」という婦人会員の問いをきっかけに「女は道の台」を再考したい。

天理教の女性信者にとって「女は道の台」と言われてきたが、それは「女は台」という教説となって定着した。端緒は婦人会が創設され、女性講師による巡回講演会が開催されるようになった時、永尾よしゑが「女は道の台」という題目で講演したことにあるとされる。これは、中山たまへ初代婦人会長が「女やからといつていつ迄も男にぶら下つて居るやうではならん。良人の光によつて光つて居るやうでは良人が居なくなれば光らんやう、自分で光を出さねばならん」と諭したことから、「女であつても道の台になる」という自律的自覚として表現され、天理教の女性信者の在り方を示すこととなったと考えられる。「道の台」は「おさしづ」の言葉で、その意味するところは真柱の講話にもある。しかしながら、時を経ると「女は台」と言い慣わされ、教団内での女性の在り方を示す用語のようになっていた。ただし、その内容は、機関誌で紹介される女性布教師の生涯を擁することであったが、一方では、時代が求める女性像に近いと思われる説き方もあった。「陰の力」「内助の功」という女性を評価する言葉の使用され、何より「台」が女性の特質や特性とともに語られてきたことが「男も台なんですか」という素朴な問いに繋がったと思われる。

個の社会の和様化

わが国は明治以後、欧米文化を導入し、ひたすら豊かさを求

川上 光代

めて来た。その結果、戦後数十年で、高度経済成長を遂げることができた。しかし日本の社会は「個の社会」「無縁社会」となってしまった。日本の歴史を振り返れば、古墳時代から中国や朝鮮の文化を取り入れてきたが、必ずわが国独自の文化として発展させてきた。その後で新たな宗教や芸術が生まれていく。「個の社会」も和様化しなくては、良き未来は訪れないであろう。

そこで「集(団)の社会」が残る農村部と「個の社会」となった都市部の民俗調査を基に考えてみた。まず農村部には血縁、地縁、家柄、信仰などに基づく大小の集団があり、一人の人が複数の集団に加入している。内、地縁大集団である「村」は、頂点に長老、底辺部に若者が位置する年齢階梯制の社会である。その社会は霊的世界にも反映している。村の構成員は生者も死者も個性をなくし、それぞれの世界の集合体になった。構成員同士は、固い絆で結ばれていたが、イリアイケンのない者や余所者に対しては排他的であった。村の排他的な性格は、構成員の結束力や共生の意識を強める結果となっている。村はどんなに貧しくても、人と人の繋がりでもつていた。

次に都市周辺の高度経済成長期に建設されたニュータウンでは、現在、独居老人や老老世帯が多い。例え働き盛りの家族が数人同居していても、別々の職場に勤めているため、家族間はバラバラで、個と個が同居している感じである。団地には自治会があり、相互扶助も行っているが、住民間の繋がりは薄い。家も地域も、「共同の作業場」でなく、「寝食の場」となった。共同の作業場である職場はというと、特に営業会社の場合、売

上げを重視するため、社員は社内に商店を構えているようなものである。社員たちは会社の構成員という意識はない。個の社会は家も地域も職場も、個と個が排他的な状態で同居している。集の社会も排他的であつたが、集団対集団の関係で、個人は集団に守られていた。しかし個人対個人は守ってくれる人がいないので、不安や孤独に陥る人もいる。

教団は個の社会の中にあるが、末端の信者まで見放すことのない確かな精神共同体である。信者たちは心が安定しているからこそ、他人に対しても優しくなれ、積極的に福祉事業にも参加できる。教団の中に「集の社会」の理想があるように思われる。

ここで個の社会をいきなり集の社会や教団にすることは不可能である。個の社会のままで、失ってしまった共生の精神を蘇らせなくてはならない。日本人は日常のなかで「おかげさまで」「ありがとう」「いただきます」「ごちそうさま」「いらっしやいませ」「おたがいさまで」という言葉をよく使う。これらの言葉は先祖への感謝や来訪神の接待や他人をいたわる共生の言葉である。「共生の精神」は古くからあつた精神で、現在、高齢者、ホームレス、保護者のいない子供、自殺志願者、犯罪者を、家族に代わって社会が支援する方向に変わっている。支援者として公の機関、NPO法人、宗教者団体、民間のボランティア、便利屋などが活動しているが、問題も起きている。支援者自身が生きる意義を知らなくては、他人に対しても無責任となる。人生の意義は例えば仏教を学ぶことによって理解でき、他人も大事な人生を生きていることがわかる。そして困窮

者がいれば、自然に手を差し伸べることができる。現代は物に恵まれ自由に行動ができるが、「幸福度」は、世界で九十番目という。物と自由だけでは、幸せになれないことを表している。やはり人と人の繋がりが大事で、「集の社会」や「教団」から学ぶべきものがあるようである。

現代都市生活における共存と神社の関わり

黒崎 浩行

近年、少子高齢化や低迷する経済状況などを背景に、NHKの「無縁社会」報道キャンペーンにみられるように、孤独に生き、死にゆく人びとに対しどのような手に手をさしのべられるのか、が問われ、様々な取り組みが注目されるようになってきた。また、東日本大震災を経た今、あらためて「絆」に関心が向けられている。

一方、現代の都市は自立したシングルライフを快適に営めるようなインフラとサービスを提供してきた。また、都市においては社会学者ゴッフマンの唱える「儀礼的無関心」のようなふるまいが当然とされてきた。しかし、現代日本の都市では見知らぬ者への関心があまりに希薄であり、それは知っている者どうしの過度に濃密な関係と表裏の関係にある、と広井良典が指摘している（『コミュニティを問いなおす』）。そして、外部（病・障害、自然、彼岸、新しい知識）に開かれたコミュニティを都市に創出することを提唱している。そのさいに広井が注目しているコミュニティの拠点のひとつが神社である。

神社をめぐる社会集団をふりかえると、まず、神社を共同で